2012 年　1 月 1 日・8 日（合併号）・東京民報「文化」欄では

戦争が変えた人生を追って
詩集「独りぽっちの人生（せいかつ）」を出版

詩人の浅見洋子さん（62）が昨年 7 月、コールサック社から出版した詩集「独りぽっちの人生」は、空襲被害者が国の責任を問う初の裁判「東京大空襲訴訟」の中で生まれた一冊です。孤独や差別に苦しみながら、原告が裁判に立ち上がる姿が表現され、朗読会の開催など、戦災孤児の目から空襲を描く詩集への反響が止みません。

東京で生まれ、育った浅見さんは 1984 年、実兄の全弘（まさひろ）さんを書いた詩集「歩道橋」でデビューし、「アルコール中毒」や「水俣のこころ」、学校内での子どもの事故などをテーマにした「もぎとられた青春」などの作品を書き続けてきました。

「夕日が今も嫌い」

詩集は 6 章に分かれ、章ごとの数連の詩で、原告らの人生を追っていきます。

「独りぽっちの人生―六歳の智恵子」の章でテーマとなるのは、第 1 審の東京地裁で陳述し、2010 年 12 月の判決が出されて間もなく亡くなった石川智恵子さんが、原告に加わっていくまでの生活。「私は今でも夕日が嫌いです」と、静かに語りかけるように始まる詩「夕日」（別項）は、圧巻で胸を打ちます。

続く「うばわれた魂―三歳の由美子」は、空襲の夜、まだ幼かったため、背中におぶわれて焼夷弾を花火のように見ていた青木由美子さんがその後、父の実家など家を転々としていく姿を書いた詩です。

兄の苦しみの一端も

詩集にはもう一つ、兄の生きた様を書いた詩が収められている見落とせない章「三ノ輪の町で―八歳のマサヒロ」があります。

アルコール中毒になり、妹や家族に迷惑をかけて 46 歳で亡くなった兄をこの詩集に加えた理由を聞くと、浅見さんは「私にこういう兄がいたことで、原告の方々が心を開いてくれた」し話します。

苦しみを耐え忍んできた多くの原告と異なり、暴れ回り、毒舌を吐き、苦しみを外に表し、身悶えする存在として書かれもマサヒロさんもまた、東京大空襲の夜、弟、妹の手を引いた母親と一緒に炎の中を逃げまどった一人でした。

「なぜ兄はあんなに人生を憎んでいたのか―亡くなった後もずっと気にかかっていましたが、原告の話を聞きながらその苦しさの一端が分かりました。誰しも皆、幸せになりたいと願っているのに、戦争が人生を変えてしまうのですね」と、浅見さんは感慨をこめます。

卒業制作で絵本に

浅見さんは事実を平明に客観視する作風が「詩になじみがない人の心をとらえる」と評される書き手です。

浅見さんが、今回の本に収録した詩作に取り掛かったのは昨年 6 月のこと。3 月に起きた東日本大震災の被害を報道する番組を見て、大空襲と同じように荒地になった東北の街の風景に衝撃を受けていたといいます。

「何かしなくては」と考えていた浅見さんのもとに、墨田区立文花中学校の美術教諭、深見響子さんが、中

学３年生の生徒が制作した絵本「独りぽっちの人生」を見てもらいたいと訪ねてきました。

深見さんはたまたま買い求めた詩集で読んだ、浅見さんの詩（「独りぽっちの人生」）に感銘を受け、絵本制作を生徒に提案。中学３年生がそれぞれ、創作しました。浅見さんは次世代の若者のイラストを「宝物をもらった」と喜び詩集に収めました。

出版後、浅見さんのもとに 100 通を超える感想が届いています。昨年 11 月に開かれた「朗読とおはなしの夕べ―東京大空襲　心を壊された子どもたち」では、俳優座の岩崎加根子さんが詩集を再構成して朗読。みごとな語りに「詩が朗読でさらに高められる豊かさ」「子どもの声が聞こえるよう」などの感想が届いています。

―私は／今でも／夕日が／嫌いです／／語気を強め／言い切る／石川智恵子／六九歳／／東京大空襲訴訟で／証人尋問にたつ／彼女／／打合せ場所を／わが家にした／代理人の夫／／二人の／傍らで／茶を入れながら／／彼女の話に／聞き入った

と紹介されています。